

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名馬場 正（上原 万里子）

学科名・専攻名農学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づく授業科目の設定を行っているが、農学専攻は各研究室がそれぞれの専門学会分野にあたり、専門領域が非常に広範、多岐に渡るため、授業科目・内容についての見直しについては苦慮している。次年度のカリキュラム改正では改善に努めた。	大学院全体の発表会および専攻のポスター発表会に多くの院生が参加した。コロナ禍であったが、専攻の発表会は対面のポスター形式で実施できた。	シラバスの改訂を行い、基準を順守して成績評価を行った。学位授与についても新しい規定に従って実施された。	科目評価では成績により、演習科目ではプレゼンテーションを中心に発表内容の総合的な評価を実施しているが、前期はコロナ禍で講義実施に制限があり、一部の内容が実施できない内容があった。	教育課程及びその内容、方法について、専攻内会議で随時問題点をチェックし、全教員内で情報共有を図り、改善・向上に努めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・植物生産、植物病理、機能開発、ポストハーベストなど多岐に亘る内容の科目が開講されている。	【長所】 ・遠隔でも対面でも専攻の特徴を伝えるために、プレゼンテーション能力、理解力を高めている。	【長所】 ・特論、演習科目により各自の専門性を、選択科目でより広い農学関連の知識を習得できる。	【長所】 ・中間報告などを通して学習状況、進捗状況を随時把握できている。	【長所】 ・本専攻は広い学問分野、学会に属する教員が所属し、様々な情報が共有されている
	【特色】 ・各分野の基礎的な内容である特論科目に加え、演習科目でより深く、応用的な内容が提供されている。	【特色】 ・多岐に亘る学会で活躍する院生が一堂に会し、発表・議論する場である。	【特色】 ・演習でのプレゼンテーションを通じて、思考力、問題解決能力の向上を図っている。	【特色】 ・専攻内の広い分野に属する教員がそれぞれの学位論文の進捗状況を相互にチェックできる。	【特色】 ・広い学問分野、学会に所属する教員により構成される専攻で、多面的な考え方が共有されている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・開講科目全体の位置付けや基礎と応用の関連性などの検討が未だ不足している。特にコロナ禍で検討が不足した。	【問題点】 ・コロナ禍の中でいかに効果的に実施できるかの検討が必要である。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・コロナ禍で実験や講義の実施に制限があり、内容の変更等が少なくなかった。	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・シラバス改訂の効果の検討が今後の課題に挙げられる。	【課題】 ・年次計画の中に組み込み、発表者がスムーズに取り組めるようにする。	【課題】 ・なし	【課題】 ・今年度から始まった複数指導体制の実施内容の評価。	【課題】 ・なし
根拠資料名	資料基 1（3 ポリシー）	資料基 2（農学専攻ポスター研究発表会）			

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （ ☒ を記入）	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	入試情報の周知を図ることができたことから、専門性を重視したかたちでの入学者選抜を行うことができた。一方、改組の影響で推薦入試および一般入試ともに志願者が減少した。	年に 3 回（推薦、Ⅰ期およびⅡ期）行われる入試時期に、その時の状況等について教員間でのディスカッションを行い、適切性について十分な取り組みを行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・遅くとも研究室配属がきまる学部 3 年次のころから、大学院進学に関する情報をあたえることができ、より意欲の高い学生に早期のうちに高いレベルに引き上げることができている。	【長所】 ・入試の回数が多いため、必然的に入試の実施について検討する機会が増加する。
	【特色】 ・学部在籍の早いうちから、より高度な専門教育や研究をめざす人材を発掘することができている。	【特色】 ・多数行われる面接等の機会により、学生の研究意欲をより適切に評価できるようになる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・比較的早期（推薦およびⅠ期）のうちに入学枠の大半を満たすことができなかった。Ⅱ期でもそれを補うことができなかった。改組に伴って定員を見直さなかった。	【問題点】 ・早期に実施される入試（推薦およびⅠ期）においては教員側の意欲も高いことが多いが、Ⅱ期の時点になるとやや意識が低下する可能性がある。
	【課題】 ・定員の充足と優秀な学生確保との両立する対策が必要である。今年度も入学辞退者がおり、入学辞退するものが徐々に増えつつあるので、進学にあたっての説明、ディスカッションを増やす必要がある。	【課題】 ・教員側も常に次代の研究者を育成するという使命をよく心得て、常に意識を高く保って進学希望者に接する必要がある。
根拠資料名	資料基 3（2021 年度博士前期一般入試過去問）	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	農学専攻内の専門分野ごとに、適切な人材が配置されるように努めている。	大学院が独立した存在ではなく、どちらかといえば学部の上の付属物的な形での存在であるため、どうしても学部における教員組織の充実が先行する傾向にある。	複数指導体制に向けて、順調に昇格人事を進めており、同一専門分野における複数教員による体制が整備された。	専攻内の専門分野が多岐にわたるため、組織的な対応が行われているとはいいにくい面もあるが、できる限り内部での昇格者を登用するなど、組織の充実に努めている。	必ずしも定期的な点検は行っていないが、学部・大学院再編等による教員の異動が予想されるため、適切な組織体制の維持・構築に向けて検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・種々の教員による専門的な指導体制が構築できる。	【長所】 ・学部における教員編制が充実すれば、それに伴って大学院の組織も充実する。	【長所】 ・若くて優秀な指導教員や指導補助教員の出現により、当該分野における進学者を多数確保できる。	【長所】 ・内部昇格者は専攻内の現状に通じており、今後の発展性についても適切な判断が下せる。	【長所】 ・学部・大学院再編による大きな異動があらかじめ予想されているので、これに対応して組織の適切性を検証できる。
	【特色】 ・同じ専攻とは思えない多様な人材を育成可能である。	【特色】 ・教員歴の長い経験豊富な指導教員を配置することができる。	【特色】 ・各専門分野において新進気鋭の研究者を確保している。	【特色】 ・学部学生時代から継続的に指導体制を整えることができる。	【特色】 ・現状における人材登用予定分野が明確である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院改組に伴い博士前期課程の体制が変わることへの対応が必要である。	【問題点】 ・短期的な状況変化に対応することが難しい。	【問題点】 ・指導体制が整備されたものの、一部の分野で複数体制による指導(准)教授の配置ができていない。	【問題点】 ・常に内部昇格者を確保することができ るわけではなく、分野によっては厳しい状況にあるところも見受けられる。	【問題点】 ・人材を補充すべき分野は明確であっても、有資格者を簡単に確保することはできない。
	【課題】 ・ある程度長い目で見て専門分野ごとの教員の育成を図る。	【課題】 ・外部からの人材導入も含め、時につなぎ的な人事体制を構築する必要性も考えられる。	【課題】 ・各分野において、できる限り昇格者による指導体制構築が求められる。	【課題】 ・学部人事の編制に際しても大学院組織のことを十分に考慮してもらうよう配慮をお願いする。	【課題】 ・学部改組に合わせた、教員組織体制のチェックが必要である。
根拠資料名			資料 4（教員公募案内）		

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名馬場 正（上原 万里子）

学科名・専攻名動物科学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・従来の畜産学専攻の講義内容を見直し、名称変更した動物科学専攻として令和4年度から専修毎の基幹科目特論Ⅰ・Ⅱを基礎に引き続き演習・実験までを一連の必須科目とするカリキュラムに改正した。	・専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定し、専攻全教員が院生の研究の進展を把握する多重なサポート体制、また院生相互が切磋琢磨する環境を整備している。 ・特別講義において積極的に外部講師を招喚し先端研究を学ばせている。	・学生に過大な負担とならないよう配慮しつつレポートを課すなど各教員が成績評価を適切に実施した。学位取得のための口頭発表審査会は専攻内の指導教授全員が出席して対面ならびにリモートで行い、学位授与を決定した。	・大学院に進学した時点で、専攻説明会において学位授与方針を説明している。また、年2回の畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションにより、担当指導教授以外にも複数の専攻内の教員で学習成果を把握、評価している。	・令和4年度にむけ新専攻名称に即したカリキュラム改正を行った。 ・授業担当者は各自、大学で実施している授業評価アンケートの結果を考慮し、講義内容の改善や向上を試みている
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各自の専修科目に関するより深い理解とともに最新知識を得られるようにしている。	【長所】 ・専攻教員全体で大学院生へのサポートが可能である。また、研究室外学生との交流により、新たな発想を得る機会となっている。	【長所】 ・偏りの無い評価を行うことができる。	【長所】 特になし	【長所】 ・担当者をできる限り複数にすることで、自己点検のみならず教員相互の点検が可能となる。
	【特色】 ・特別講義を配し、外部講師による動物科学の専修分野を幅広く俯瞰した最新の専門知識の習得が可能になった。	【特色】 ・教員からのアドバイスのみならず、大学院生同士のディスカッションにより、切磋琢磨できる。	【特色】 学位取得の口頭発表を対面とリモート併用で行い、従来であれば体調不良で欠席していた学生や、入国できない留学生に対して学位授与ができる	【特色】 特になし	【特色】 ・新カリキュラムは専修研究室の基幹科目を中心としており、各専修を深く学ぶことができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教職免許取得のための選択科目単位数が最小限であるとの指摘を受けた。	【問題点】 ・コロナ禍により対面によるプレゼンテーションの機会が減少した	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・リモートでのプレゼンテーションに対する質疑応答の活性化	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	◆大学院シラバス ◆大学院学生便覧 ◆履修ルールやモデル ◆特別講義実施記録 ◆専攻3ポリシー	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆大学院シラバス ◆学位論文審査基準 ◆口頭発表審査会実施記録	◆専攻説明会実施記録 ◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録 ◆専攻3ポリシー	◆授業評価アンケート ◆授業評価アンケートに対する改善計画書

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・大学院入試説明会の際、大学院進学希望学生全員に対し、アドミッション・ポリシーおよび入試制度について説明をしている。 ・入試の面接、試験の得点や順位などの確認は、指導教授全員で行い、公正に実施している。 推薦入試制度について、平成 31 年度から実施時期が 5 月となり、学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難と考え、一旦停止した。現在は推薦入試の復活も視野に入れて各研究室教員が学部 3 年の早い時期から学生の適性を見極めるため試行錯誤している。 令和 2・3 年度はコロナ禍により全部または面接のみをリモート入学試験を行った。このため遠隔地試験のシステムを構築することが出来た。	・Ⅰ期およびⅡ期入試採点時には指導教授相互に情報公開とディスカッションを行っている。 ・推薦入試については実施時期の早期化により学生の適正を見極めることが困難であること、GPA に下限を設けると農業高校出身者や、万能ではないが専門に優れており、進学後に成長が見込まれる者を救い上げることが出来なくなり、当専攻が考える推薦入試のメリットが無くなると考え、一旦停止している。 ・各専修で指導教授が学部学生の適性を見極めたうえで積極的に声をかけることで現在定員を超える修士学生を確保できている。 ・他大学を含む多様な受験生確保のため入試英語科目に TOEIC 導入を検討している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・外出禁止状態でも入学試験を実施することが出来る	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・受験の機会を増やすことができる	【特色】 ・各専修で指導教授が学部学生の適性を見極めたうえで積極的に声をかけている。博士前期についてはここ数年、2 回の入試を行うことで定員を超える学生数を確保することが出来ている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・畜産学専攻では推薦入試制度を導入したが、入試実施時期の早期化により学生・教員とも被推薦者の適正を見極めることが困難で、一旦停止している。学部 3 年生の時点で学生の資質を評価し、推薦に値する者を見極めることは困難である。	【問題点】 ・当専攻はほぼ全員が学内からの進学者である。学部改組により学部卒業生数は R3 年度から 2 割強減少し、進学希望者の減少が危ぶまれる。
	【課題】 ・学部 3 年生の適性を教員が早期に見極め、推薦入試制度の復活を検討する	【課題】 ・院生確保のためより現状より早い時期から学部生への大学院進学を意識させ、指導教授側も早期に学生の適性を見極める必要がある。
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆専攻 3 ポリシー ◆大学院入試説明会の実施記録（参加者数等含む） ◆大学院入試志願者数表	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆研究進捗プレゼンテーション実施記録

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・各専門分野に適切な人員を配するとともに、若手教員が大学院授業担当者に昇格できるよう、各指導教授および若手教員自身に積極的に周知している。 ・大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	・大学院授業担当者を増やすことで、大学院教育研究活動の更なる向上を目指している。	・専攻の各指導教授に対し、昇格申請の案内を積極的に実施している。令和元年には2名が指導教授に、令和2年には1名が准教授に、令和4年には1名が指導教授に昇格する。	・年に2回の頻度で、専攻全体での研究進捗プレゼンテーションを行っている。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握し、院生に対する教員の指導が適切に行われていることを確認する機会としている。 ・令和2～3年度は遠隔授業導入を余儀なくされ、学生、教員とも通信教育実施のためのスキルアップが図らずも行われた。	学部再編に伴い、できる限り適切な人員配置になるよう努力した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・各分野に専門性の高い教員を組織できる	【長所】 ・同一分野に職階の異なる複数教員を配置できる	【長所】 ・特になし	【長所】 ・継続した資質向上を見極めることが出来る。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・幅広い分野に対応する教員が確保できる	【特色】 ・数十年単位で同一分野の研究活動を継続することができる	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・専修分野ごとに指導教員数にばらつきが生じている	【問題点】 ・年齢構成がうまくいかない場合がある	【問題点】 ・昇格が停滞し、最適な人材が揃わず、指導教授、大学院指導教員の分野が偏る場合がある	【問題点】 ・資質向上のための方策を立てることが物理的に困難である	【問題点】 ・学部の編成が優先されるため、本専攻にとって必ずしも最適の人材を確保できていない。
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・年齢構成の是正を図る	【課題】 ・昇格が停滞する場合には外部から臨時の指導体制を構築するなどし、昇格を促すとともに、教員候補となる学内出身者の育成が必要である。	【課題】 ・特になし	【課題】 ・専攻教員全体で議論し、組織の適切性を判断し改善できる場を設定する必要がある。
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針 ◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの	◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆研究進捗プレゼンテーションの実施記録	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料、◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名馬場 正（上原 万里子）

学科名・専攻名農学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学部との教育連携方法の検討		
実行サイクル	5 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	年サイクル（平成 年～ 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	大学院授業科目について、学部での関連授業科目との連続性を意識した授業内容の実施を検討するとともに、シラバスにおいてそのことを具体的に表現した記述を行う。5 年サイクルの最終年度であり、学部改組後のカリキュラムもすべて出揃い、大学院のシラバスのチェックを行う。		
目標達成を測定する指標	毎年のシラバスの改定に際して順次学部と授業との連続性を意識した表記を心掛ける。		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	昨年度に続き、コロナ禍の影響により遠隔形式の授業での学部での講義内容の変更が多く、さらに実験時間の制約もあり、学部との関連性を深めることが難しかった。次年度以降の課題とする。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・シラバス改訂により学部学生が専門分野に関する知識技術の積み上げを具体的にみられるようになり、学部段階から徐々にステップアップさせ、大学院進学に際しての障壁を低く感じられるようになる。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・学部との連携により、より多くの院生が 6 年一貫的教育を受けることが可能となる。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・コロナ禍の影響が強く、昨年度と同様に専攻内での協議も不足した 1 年間だった。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・漸く教員も新たな講義形式に慣れてきたので、その中でのさらなる質の向上を図る必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	資料包 1（シラバス抜粋）		

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	博士研究員制度の導入検討		
実行サイクル	5 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）	年サイクル（平成 年～ 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	博士課程進学者を増加させるとともに、それに付随して課程修了者の中から順次博士研究員を確保する。また外部の適格者についても採用できるように検討する。		
目標達成を測定する指標	専攻内のいずれかの研究室（できれば複数）に博士研究員が在籍する。		
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	コロナ禍による景気動向により博士後期課程進学者が減っており、定員枠を満たすことが出来ておらず、さらにその後の博士研究員はさらに難しくなっている。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・ 特定の専門分野について最新の知見や技術を有している者が研究教育に関与することにより、大学院や学部における研究教育レベルの向上が図れる。また比較的中長期的な研究にも対応できる。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・ 博士研究員が大学院や学部レベルにおいて高度な教育研究指導を行うことにより、自身のキャリアアップを図ることができる。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・ 博士前期課程から後期課程への進学者がさらに減ってきている。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・ 年次変動があるにしても、博士後期課程への進学者を増やすための経済的サポートを含めた方策を考える必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	連続して入学定員以上の入学者を確保する。	大学院生複数指導体制の確立	
実行サイクル	__3__年サイクル（令和2年～4年）	__3__年サイクル（令和 2年～4年）	_____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	学試験の種類には推薦，一般（Ⅰ期およびⅡ期）があるが，個々の入試の枠にはとらわれず，全体を通して入学定員枠以上の入学者を獲得できたかどうかを検証する。	令和2年度から開始される大学院生複数指導体制に対応するための専攻内での体制づくり、およびその運用方法を各年度の結果を検証しながら確立する。	
目標達成を測定する指標	個々の実施年度における入学者数が少なくとも3年間連続して入学定員以上となること。	学部改組後の大学院改組により指導教員の構成も変化するが、3年間のうちに学生指導における問題や課題の洗い出しを行い、適切な指導体制を確立すること。	
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	コロナ禍および学部改組に伴う学科定員の削減と研究分野の縮小により、各入試で志願者が減少した。次年度以降は、教員から4年生への積極的な大学院への勧誘、さらに説明会などの一層の充実が必要である。研究意欲を向上し、大学院進学を促す一環として学科の卒論発表会を実施した。	大学院の複数指導体制および学位審査方法の明確化について、導入2年目であり問題なく実施できた。博士後期課程は、在籍期間が長くなったものの、当該の1名が博士論文を提出して審査に合格し博士の学位を取得した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・定員枠を確保し多くの院生が在籍することで、研究室間の交流を通して異分野の研究を含めた理解が深まる。	【長所】 ・複数指導体制により、学生に対する評価が多面的となり、また指導学生への公平性や学生の安心感が高まる。	【長所】 ・
	【特色】 ・ほぼ全員が本学部生からの進学であり、継続的かつ長期的なテーマに取り組み可能であり、深く広く研究を進められる。	【特色】 ・研究指導と学位審査の責任を明確にし、分けて行うこと、さらに点数化を実施することで学位審査の基準が明確になる。	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・定員枠の確保は極めて重要な課題ではあるが、そのことにこだわるあまり不適格者を入学させ、結果的に中退となった者もあり、入学者選抜は慎重に行われるべきである。	【問題点】 ・農学専攻は1研究室が1学会対応であり、研究テーマが多岐にわたるため複数指導体制を組む教員の適性を確保することが他専攻に比べ容易ではない。	【問題点】 ・
	【課題】 ・大学院に進学し、さらなる教育研究の指導を受けることによって、学部卒業レベルでは到達できないより魅力的な進路を得ることができ実例をしっかりと示せるように、教育研究だけでなくキャリア教育を行うことが必要である。	【課題】 ・2年目としては概ね上手く実施できたが、今後継続していく中で問題点を洗い出し、より良いものにしていく必要がある。	【課題】 ・
根拠資料名	資料包2（農学科卒論発表会）	資料包3（審査報告概要並びに審査報告会実施記録）	

学部・研究科名農学研究科

学部長・研究科委員長名馬場 正（上原 万里子）

学科名・専攻名動物科学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	大学・大学院連携教育の検討	大学院生と専攻教員の相互コミュニケーションの継続
実行サイクル	3 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）	3 年サイクル（令和 2 年～ 4 年度）
実施 スケジュール	大学院Ⅰ期入試合格者に対する後学期大学院講義の受講を検討する	半年に1回の頻度で、畜産学専攻全体での研究進捗プレゼンテーションの機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および生活状況を把握する。 令和3年7月 前期大学院研究進捗発表会 令和4年1月 後期大学院研究進捗発表会
目標達成を測定する指標	学部学生の大学院講義聴講者数	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：30名） ・学部学生参加数（目標：12名）
自己評価 （ ☒ を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	今年度大学院Ⅰ期入試は受験生19名、合格者18名で最終的にはうち2名が入学辞退した。それぞれ経済的理由と他大学院進学(昆虫専攻)のためであった。大学院の講義自体がリモートとなったこともあり、学部生に大学院講義を受講させることを検討するに至っていない。外部講師を招いての大学院特別講義については学部生の参加が確認された。	コロナ禍により学内でポスター掲示のみ行い、質疑はメールで行ったため、教員と院生とのコミュニケーションは非常に限定的となった。また、学部生の積極的参加も認められなかった。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・Ⅰ期試験合格者の大学院進学モチベーションが維持できる	【長所】 ・メールによる質疑を行ったため、内容の保存が可能である
	【特色】 ・大学院入学後の講義受講時間を修論、就職活動などに振り替えることが出来る	【特色】 ・指導教員以外、専攻研究室以外の教員、院生、学生とのコミュニケーション
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・4年度から新カリとなり、専門科目が前・後期、学年をまたいだものとなり、後期独立で受講できる科目が少ない	【問題点】 ・リモート環境下での質疑応答
	【課題】 ・R4後期に配した特別講義への学部生参加の呼びかけ	【課題】 ・多数の教員、学生の参加
根拠資料名	◆専攻説明会実施記録 ◆合否判定会議事録 ◆R4年度大学院時間割	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆学会発表・専攻ポスター発表記録

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院生の研究レベル高位平準化		
実行サイクル	____3____年サイクル（令和 2年度～ 4年度）	____年サイクル（平成 年～ 年）	____年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	半年に1回の頻度で、専攻全体での研究進捗発表会の機会を設定する。専攻の教員全体で大学院生の研究の進展および内容を議論することで、学生の研究レベルの向上や改善が可能になる。 令和3年7月 前期大学院研究進捗発表会 令和4年1月 後期大学院研究進捗発表会		
目標達成を測定する指標	・畜産学専攻所属の大学院生および教員参加数（目標：30名） ・学部学生参加数（目標：12名）		
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻主催の大学院研究進捗発表会は前後期ともリモート開催となったが発表対象者全員が参加した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学生自身に定期的、客観的に研究進捗状況を確認させる	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・指導教員以外の教員による評価、研究室以外の院生の研究状況の把握ができる	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・リモート環境下での質疑応答	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・研究成果の学外への発信、評価	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料 ◆学会発表・専攻ポスター発表記録 ◆大学院特別講義記録 ◆修士論文審査会 ◆博士論文審査会		

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	大学院博士前期課程進学率の向上を目指した推薦入試制度の再導入 および定着	博士後期課程進学者の獲得	
実行サイクル	____ 3 ____ 年サイクル（令和 2 年度～ 4 年度）	____ 3 ____ 年サイクル（令和 2 年度～ 4 年度）	_____ 年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	令和 5 年度入試(4 年度実施)での導入を目指して、研究室所属学部 3 年次学生に対し各研究室が年度内の早期の適正判断を行うよう工夫 する	畜産学専攻博士後期課程に進学する大学院生を積極的に獲得し、将来の 大学教員候補を育成する。特に、各研究室における活動の中で専攻教員 が大学院生と密なコミュニケーションを取り、博士後期課程の情報など を積極的に提供する。 令和 3 年 6 月および 12 月 大学院進学説明会実施	
目標達成を測 定する指標	推薦入試制度を利用した畜産学専攻への大学院進学者数 （目標：大学院入学定員数の充足）	博士後期課程進学者数	
自己評価 (☒ を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	推薦入試の実施時期がさらに早まり、研究室教員が学部生の希望、適 性を見極める時間がない。現状ではこの制度を導入する古ことなく博 士前期課程の定員を十分満たしている。	I 期試験、II 期試験においてそれぞれ後期課程内部受験者 1 名ずつ、合計 2 名合格、R3 年度秋入学試験に専攻出身の社会人 1 名合格	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・特にない	【長所】 ・特にない	【長所】 ・
	【特色】 ・特にない	【特色】 ・学部出身者が後期課程まで進学し農大の学位を得ることで将来の大学 教員を確保する	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・大学院指導教員による学部学生の早期の適性判断が困難である。	【問題点】 ・受験生の分野の偏り	【問題点】 ・
	【課題】 ・できるだけ早い時期からの候補学生とのコミュニケーション	【課題】 ・就職先の確保	【課題】 ・
根拠資料名	◆専攻会議での検討を示す議事録・資料	◆専攻説明会実施記録 ◆合否判定会議議事録	